

# 干寶『搜神記』の孫吳觀と蔣侯神信仰

渡邊義浩

## はじめに

東晉の初期、干寶が著した『搜神記』は、天人相關説を搖るがような瑞祥と災異に対して、天人相關説に依らない災異が生成される論理があることをその事例と共に論証しようと試みた書籍である<sup>(1)</sup>。その一方で、天子に起因する瑞祥と災異に対しては、従来の天人相關説に基づき、その事例に対する解釈と事應を示す五行志に近い記述を有していた<sup>(2)</sup>。

『搜神記』が収録する事例には、三國時代に取材するものがあり、中でも東晉と建國地域を共にする孫吳に関わるものが多い。それらの中から孫吳に否定的な事例を重視する小南一郎は、次のように述べる。すなわち、干寶にとつて、孫吳の滅亡は、特に惜しむ必要もない事件であった。南方の中小在地世家層にとって、孫吳は必ずしも望ましい

権力ではなかった。それは、大豪族出身の陸機が「弁亡論」を著して、孫吳の欠陥を指摘しつつも、吳郡の陸氏と孫吳の一体性を強調したことに対して、干寶が江南の寒門出身であることを理由とする、としている。また、田中靖彦は、小南の見解を継承し、干寶の『搜神記』には、江東人士の孫吳への怨念が込められており、晉正統論とのつながりの中で、曹魏正統論的発想を干寶は抱いていた、という。

しかし、天人相關説に基づき検討すると、『搜神記』の対孫吳觀は批判とだけ把握することはできない。「六朝」という概念の成立を視座に入れたとき、江南に國家を樹立した東晉が、かつて同地域に國家を保持していた孫吳、およびその旧臣たちといかに向き合ったのか、という問題は重要である。また、東晉に仕えた江東人士は、東晉と孫吳をどのような関係性の中で把握したのであろうか。本稿は、

かかる課題を解決するために、『搜神記』の孫吳觀を検討し、  
蔣侯神信仰との関わりを論ずるものである。

## 一、孫吳君主への評価

注(三) 所掲小南論文は、干寶の『搜神記』が江南土着の塞門の著作であることを立論の前提とするが、干寶は、四世祖までは華北に居住しており、純粹な意味での土着吳姓ではない。<sup>(5)</sup> それでも、父の塋は、孫吳の海鹽縣令となっており、干寶が旧孫吳系臣下であることは、間違いない。そして、同じく旧孫吳系臣下である東晉の葛洪の『抱朴子』と比べても、<sup>(6)</sup>『搜神記』に孫吳への批判が多く収録されることは事実である。

于吉に呪い殺される孫策の話は、その代表的な事例である。『搜神記』によれば、孫策が于吉を伴い許を攻めようとした際、兵士が孫策よりも于吉を尊重するので、孫策は于吉を捕らえさせた。その際、日照りが続いていたので、于吉に雨乞いをさせ、降ればこれを許すことにした。于吉の呪術により雨は降ったが、それを恐れた孫策は、約束を破り于吉を殺害する。そののち孫策は、于吉に次のように呪い殺されたという。

搜神記に曰く、「策既に于吉を殺すや、獨り坐す毎に、

彷彿として吉が左右に在るがときを見る。意深く之を惡み、頗る常を失ふ有り。後に劍を治め方に差えんとして、鏡を引き自ら照らすに、吉の鏡中に在るを見て、顧みるも見ること弗し。是の如きこと再三、因りて鏡を撲ちて大いに叫び、創皆崩裂し、須臾にして死す」と(『三國志』卷四十六 孫討逆傳注)。

注(四) 所掲田中論文は、于吉(干吉)を干寶の同族とした上で、この記述を一族の、そして江東人士の孫吳への怨念を描いたものとする。しかし、注(五) 所掲李著書は、于吉と干寶を同族ではないという。それ以上に、曹操が左慈に翻弄され、神異を示した梨の木を斬ったために病に伏し、曹丕と曹叅も無学を笑われているように、『搜神記』に収録される話で、道士や方士に批判される君主は、孫氏に限定されない。

それでも、『搜神記』が、于吉を殺したこと以外にも、陸康一族を族滅するなど江東豪族に抑圧的であった孫策<sup>(7)</sup>だけでなく、孫吳の建国者である孫權への批判も収録することには留意したい。

干寶の搜神記に曰く、「介琰なる者は、何許の人なるかを知らざるなり。吳の先主の時、北より來ると云ひ、其の師たる白羊公に従ひ、東海より入る。琰吳主と

相聞す。吳主琰を留め、乃ち琰の爲に宮廟を架く。

一日の中、數四人を遣して往き起居を問はしむ。或ひは琰の見ゆること十六・七の童子の如く、或ひは壯年の如し。吳主術を學ばんと欲するも、琰帝の常に内御多きを以て、月を積むも教へざるなり」と(『初學記』卷十八人部中)。

方士の介琰が、孫權に礼遇されたにも拘らず、年齢を自由に操る術を教えなかった理由は、内御(後宮)が多いことにあった、というのである。『搜神記』は、確かに孫吳に対して批判的な事例を収録している。

しかし、その一方で『搜神記』は、孫吳を正統視することに繋がる孫策と孫權の異常出産を次のように伝えている。搜神記に曰く、「初め夫人孕みて月の其の懷に入るを夢み、既にして策を生む。權の孕に在るに及び、又日の其の懷に入るを夢む。以て堅に告げて曰く、「昔策を妊み、月の我が懷に入るを夢む。今や又日の我が懷に入るを夢みるは何ぞや」と。堅曰く、「日月なる者は、陰陽の精、極貴の象なり。吾が子孫其れ興らんか」と」と(『三國志』卷五十孫破虜吳夫人傳注)。これは、天命を受けた国家の創始者の母が、その国家の守護神である五帝と交わることで帝王を孕むという感生帝

説に近い異常出産の記録である。こうした話を『搜神記』に収録することは、干寶が孫吳を建国した孫權、その兄の孫策が天命を受けていることを承認する態度の表明と考えてよい。

さらに、『搜神記』は、孫吳の君主に天人相關説を適用する事例を収録する。

搜神記に曰く、「吳の景帝より以後、衣服の製、上を長くし下を短くす。又積領は五・六にして、裳居は一・二なり。故に歸命は情を上<sup>はな</sup>に放ち、百姓は下に側むの象なり」と(『唐開元占經』卷一百十四器服休咎城邑宮殿怪異占)。

この話について、『宋書』五行志は、次のように、干寶の言葉を伝える。

孫休の後、衣服の制、上に長く下に短く、又積領は五・六にして、裳居は一・二なり。干寶曰く、「上饒奢に、下儉逼するは、上餘り有りて、下足らざるの妖なり」と。孫皓に至り、果たして奢りて暴かに情を上<sup>いた</sup>に恣にして、而るに百姓困を下に彫み、卒に以て國を亡ぼす。是れ其の應なり(『宋書』卷三十五行一服妖)。

『宋書』によれば、干寶は、「景帝」(孫休)の時の上衣

が長く下裳が短い服制を「上餘り有りて、下足らざるの妖」(上が贅沢、下が貧困の象を示す服妖)と認識していたことになる。これは、天人相關説に基づく災異思想であり、『宋書』は、孫吳の滅亡をその事應としている。『搜神記』に記される、「歸命」(侯の孫皓)が上に放縱となり、百姓が下に傷んだことは、干寶の見解と考えてよい。もちろん、ここには孫皓への批判が見られるが、それを天人相關説に基づく災異思想で説明する限りにおいて、孫吳という国家を天譴を受ける対象、すなわち、天人相關説が適応される、天命を受けた正統な国家と主張していることになるのである。

干寶は、『搜神記』に孫吳の君主個人やその施政を批判する話を収録している。しかし、それは干寶が孫吳の存在を否定していたことには繋がらない。干寶は孫吳を服妖という災異を天から譴責として受ける、正統な国家と認識していたのである。

## 二、三國鼎立の歴史觀

孫吳を天命を受けた正統な国家と承認する干寶の『搜神記』は、三國時代の他の二國について、どのような歴史觀を持つのであろうか。曹魏から検討しよう。

曹魏が正統な国家であることは、宋の大夫である邢史子臣の予言の話に記される。邢史子臣は、周の敬王の三十七(前四八三)年から、四百六十年後に邾が天下の王となることを予言した。その「邾は曹姓、魏も亦た曹姓」であり、これは「魏の興くる」の予言であるという。ところが、計算するとその年は前二三年に当たり、王莽台頭の予言に相応しい。干寶はそれを、邢史の計算違いか、誤った伝承かを知ることとはできない、と論評している(『三國志』卷二文帝紀注引『搜神記』)。

この話からは、干寶の「天道」を説明しようとする強い思いを読み取ることができるが(注(一) 所掲渡邊論文)、本稿の関心は邾氏にある。堯の末裔と称する火徳の前漢・後漢からそれぞれ禪讓を受けた莽新と曹魏は、ともに舜を祖先と主張している。ただし、曹魏は当初、司馬懿派の蔣済が主張するように、曹氏の祖先を邾氏としていた。しかし、邾氏は舜を祖先と定めた明帝のときに退けられている。干寶は、「邾は曹姓」と明言する話を収録することで、晉の祖である司馬懿派の主張を踏襲したうえで、曹魏を正統な国家と認識しているのである。

また、蜀漢の火徳(赤色)については、「赤厄三七」という「古言」に基づき、赤は三七(二一〇年)ごとに厄が

ある、とする話を収録する。前漢が建国された前二〇二年の二一〇年後にあたる後八年が莽新の建国年であるように、後漢が建国された二五年の二一〇年後が、赤の大厄に当たるとするのである。しかし、厄を黄巾の乱とするため、この事例でも年数が合わず、干寶は苦悩する（『法苑珠林』卷四十四 君臣篇引『搜神記』）。後漢建国の二一〇年後は二二五年で、諸葛亮陣没の翌年にあたる。劉宋期の『異苑』に収録される、諸葛亮に火徳を象徵させる話<sup>10</sup>であれば、諸葛亮の死去を赤の大厄と把握すればよいが、『搜神記』にそこまでの記述はない。それでも、後述するように、干寶は、晉を三國すべての正統を継承する国家と位置づけており、蜀漢も曹魏・孫吳と同様、『搜神記』では正統な国家と認識されていたと考えられる。

このように曹魏・孫吳・蜀漢の三國を対等に扱う三國鼎立の歴史観は、旧孫吳臣下である陸機に見られるものである<sup>11</sup>。葛洪が西晉時代の吳郡を代表する貴族であった陸機の影響を受けているように、干寶もまた、陸機と同様、西晉が直接禪讓を受けた曹魏だけではなく、孫吳、さらには蜀漢をも正統な国家と認識していたのである。

もちろん、『搜神記』は、干寶が仕える晉の正統性を証明する話も収録している。

搜神記に曰く、「初め漢の元・成の世、先識の土に言有りて曰く、「魏年に和有れば、當に開石 西三千餘里に有るべし。五馬を繋ぎ、文に曰く、大いに曹を討つ」と。魏の初めて興るに及ぶや、張掖の柳谷に、開石有り。始め建安に見へ、形黃初に成り、文太和に備はる。周圍七尋、中高きこと一仞、蒼質素章にして、龍馬・麟鹿・鳳凰・仙人の象、粲然として咸著はる。此の一事なる者は、魏・晉代はり興くるの符なり。晉の泰始三年に至り、張掖太守の焦勝上言するに、「郡の本國に留むる圖を以て、今の石文を校するに、文字の多少、同じからざれば、謹みて圖を具へて上る」と。其の文を按ずるに五馬の象有り、其の一は人の平上幘にして、戟を執りて之に乗る有り。其の一は馬の形の若くにして成らざる有り、其の字に金有り、中有り、大司馬有り、王有り、大吉有り、正有り、開壽有り。其の一は行を成して曰く、金當に之を取るべし」と（『三國志』卷三 明帝紀注）。

『搜神記』は、曹魏の建国とともに張掖郡に石の瑞祥が現れた話を収録している。石は、金徳の象徴である。石の瑞祥は、土徳の曹魏に代わって、金徳の司馬晉が勃興する予兆である。その証拠に石には、「大司馬」という司馬氏

を象徵する言葉や、「金當に之を取るべし」といった予言（符命）が記されている。干寶は、東晉の史家として、讖緯思想をも伴った天人相關説に基づく五德終始説により、曹魏から西晉への革命を正統化する話を収録し、それを承認しているのである。

さらに、干寶は、金徳の晉が混乱する予兆も収録する。これも孫吳と同様、晉を批判するのではなく、晉が天命を受ける正統な国家であるからこそ、天譴を記録するのである。

（晉の太康）六年に至り、南陽に兩足の虎を獲たり。

虎なる者は陰の精にして陽に居る、金の獸なり。南陽は、火の名なり。金の精火に入りて其の形を失ふ。

王室亂るるの妖なり。……右十三驗 搜神記より出づ  
〔法苑珠林〕卷三十二變化）。

『搜神記』は、南陽郡で二本足の虎が捕まった話を、金の精が火の中に入ってその形を失ったものであり、王室が乱れる妖である、とする。これに對して、王隱の『晉書』は、国の四方のうち二方が失われると解釈し、懷帝・愍帝の禍が起こる予兆とする。<sup>(13)</sup> また、『宋書』五行志は、これを「毛蟲之孽」とし、六年の六を「水數」として、西晉の滅亡となる懷帝・愍帝の殺害まで三十五年間であつたと解

釈する。<sup>(14)</sup> その際、『宋書』が、傍線部の「虎なる者」から「妖なり」までを「干寶曰く」と伝えるように、『搜神記』に記される災異の事應は、干寶独自の解釈である。曹魏の話とは異なり、東晉の史官として、西晉時代に天から下された譴責に對して、「王室が亂る妖」であると、自らの主張を記しているのである。

干寶は、解釈の中で南陽が「火の名」であることに着目し、「金の精火に入りて其の形を失ふ」と述べている。愍帝を殺害して西晉を滅ぼした者は、匈奴の劉聰である。劉氏は、漢の一族を称しているのに、火徳にあたる。干寶は、五德終始説に基づく五行志のように、火徳の劉氏（匈奴）により、西晉が混乱することを事應としているのである。

こうして西晉は滅亡するが、建康に拠った司馬睿のもと晉は再興される。これが、干寶の仕える東晉である。東晉は、曹魏の禪讓を受けた金徳の西晉の再興であるため、曹魏の土徳を継承した。そうであれば、東晉は、三國のうち曹魏のみを正統とする国家となるべきである。ところが、干寶は、晉の正統の継承について次のような話を伝える。

搜神記に曰く、「吳は草創の國なるを以て、信堅固ならず、邊屯の守將は、皆其の妻子を質とし、名づけて保質と曰ふ。童子・少年、類を以て相與に嬉遊す



る者は、日に十數有り。永安二年三月、一異兒有り、長は四尺餘り、年は六・七歲可<sup>ば</sup>り、青衣を衣、來りて羣兒に從ひて戯るも、諸兒之を識るもの莫きなり。

皆問ひて曰く、「爾<sup>なんぢ</sup>は誰の家の小兒にして、今日忽ち來たるか」と。答へて曰く、「爾が羣戲樂するを見故に來たるのみ」と。詳かにして之を視れば、眼に光芒有り、燐燐として外に射る。諸兒之を畏れ、重ねて其の故を問ふ。兒乃ち答へて曰く、「爾我を惡むか。我人に非ざるなり。乃ち熒惑星なり。將に以て爾に告げんとすること有り。三公鉏<sup>ほろ</sup>び、司馬如<sup>いた</sup>らん」と。諸兒大いに驚き、或もの走りて大人に告ぐ。大人馳せ往きて之を觀る。兒曰く、「爾を捨てて去<sup>ゆ</sup>かんか」と。身を竦<sup>そび</sup>やかして躍り、即ち以て化せり。仰ぎて之を視るに、一匹の練<sup>ねりぎぬ</sup>を引くが若くして以て天に登る。大人の來たる者、猶ほ焉を見るに及び、飄飄として漸く高く、頃<sup>しほ</sup>く有りて没す。時に吳の政峻急なれば、敢て宣ぶるもの莫きなり。後五年にして蜀亡び、六年にして晉興り、是に至りて吳滅びて、司馬如<sup>いた</sup>らん」と(『三國志』卷四十八 孫皓傳注)。

この話では、熒惑星が子どもの姿となつて、「三公鉏<sup>ほろ</sup>び、司馬如<sup>いた</sup>らん」という予言を告げる。『搜神記』が大きな影

響を受けている『論衡』卷二十二訂鬼によれば、世の童謡というものは、熒惑星がこれを歌わせるといふ。その熒惑星の予言には、三國鼎立の歴史觀が明確に現れている。

永安二(二五九)年の前年、景帝孫休は、孫綝を殺害して親政を開始した。その後、四年(『搜神記』は五年)となる炎興元(二六三)年に蜀漢は滅亡し、六年後となる咸熙二(二六五)年に曹魏は西晉に禪讓し、二一年後の天紀四(二八〇)年に孫吳は滅亡した。多少のズレはあるが、予言どおり三國は滅亡している。

熒惑星の予言で注目すべきは、「三公鉏<sup>ほろ</sup>び、司馬如<sup>いた</sup>らん」という言葉である。『宋書』五行志は、「三公」と「司馬」について、干寶の次のような解釈を伝える。

干寶曰く、「後四年にして蜀亡び、六年にして魏廢れ、二十一年にして吳平らぐ。是に於て九服晉に歸す。魏・吳・蜀と與に、並びて戰國を爲す。三公、鉏<sup>ほろ</sup>び、司馬如<sup>いた</sup>らんの謂なり」と(『宋書』卷三十一 五行志二)。

干寶は、「三公」を曹氏・劉氏・孫氏と解釈し、西晉を建国した司馬氏は、それらの「三公」の滅亡を繼承する形で、「九服晉に歸」す、すなわち直接的に禪讓を受けた曹魏の領土だけではなく、中国全体を統一するに至ったと主張しているのである。

西晉の陳壽は、『三國志』を著す際に、魏書にのみ本紀を設けて、西晉が曹魏から正統を継承したことを表現した。<sup>(16)</sup>これに対して、東晉の干寶は、実態としては、孫呉の領土のみを支配するに過ぎないにも拘らず、三國鼎立のあと、晉は三國のすべてを受けて成立したと主張する。ここに、華北や蜀を五胡に占領されるなかで、東晉があくまでも中国全土の正統な支配者であることを主張する東晉の史家としての立場がある。

こうした主張にも拘らず、東晉が江南のみを支配していた現実には、動かし難いものであった。それでは、自らも旧孫呉系臣下であった干寶は、実際に東晉が存在する江南地方をかつて支配していた孫呉からの継承関係を『搜神記』にどのように表現したのであろうか。

### 三、蔣侯神信仰

東晉における孫呉との継承関係を示すものに、蔣侯神信仰がある。蔣侯神は、孫權の蔣陵が造営された蔣山（鍾山より改名）に、蔣王として祀られる地方神である。その祭祀の始まりは、『搜神記』の記述に基づき孫權の時とされている。<sup>(17)</sup>蔣侯神信仰は、六朝を通して見られ、南北朝の対立を決定づけた淝水の戦い以降は、南朝の守護神となつて

<sup>(18)</sup>いく。

東晉において、蔣侯神が祀られる蔣山は、成帝の咸和八（三三三）年正月、初めて北郊を祀った際に、沂山・嶽山・白山・霍山・醫無閭山・會稽山・松江・錢唐江など四十四神の一つとして配祀される（『晉書』卷十九 禮志上）。それ以前において、東晉建国の立役者である王導が、蔣侯神を信仰していたことは、『晉書』に次のように伝えられている。

（王）悦の疾篤きに及び、（王）導憂念特に至り、食はざることを積日。忽として一人の形狀甚だ偉にして、甲を被り刀を持するもの見はる。導問ふ、「君は是れ何れの人ぞ」と。曰く、「僕は是れ蔣侯なり。公の兄佳からざれば、爲に請命せんと欲するが故に來たるのみ。公復た憂ふること勿かれ」と。因りて食を求め、遂に數升を噉ふ。食畢はるや、勃然として導に謂ひて曰く、「中書の患、救ふ可きに非ざる者なり」と。言訖はるや見へず。悦亦た殞絶す（『晉書』卷六十五 王導傳附王悦傳）。

『晉書』によれば、王導の子である王悦の臨終に蔣侯神が現れ、子を救うために來たと告げたため、王導は治癒を願つて接待する。ところが、蔣侯神は、救えないことを告



げ、その直後に王悦が卒した、というのである。子の救命は果たせなかったものの、王導が子の臨終の際に、蔣侯神に祈ったという伝承が記録されていることは、王導が江東の守護神である蔣侯神への信仰を持つことを通じて、江東社会の東晉への支持を求めようとしたことの反映と考えてよい。

王導が、旧孫吳系臣下である江東人士を拔擢して東晉を支えようとした政策に対して、葛洪はそれを『抱朴子』により高く評価している（注（六）所掲渡邊論文）。干寶もまた、『晉紀』の編纂を命ぜられた理由は、王導の上疏に基づく『晉書』卷八十二「干寶傳」。王導の拔擢により、干寶は史家に任命されたのである。したがって、干寶は『搜神記』の中で、王導に仮託して、自らの編纂理由の一端を述べている（注（一）所掲渡邊論文参照）。このように旧孫吳系臣下と結びつきを持つ王導が、蔣侯神を信仰したと伝えられる理由は、蔣侯神が孫吳の守護神であったことに求められる。

他の二国より遅れて即位した孫權は、東南の運氣と瑞祥を抛り所に土徳を標榜したが、土徳は曹魏と重複するため、その正統性は不安定であった。そこで、孫皓は、土徳の曹魏の滅亡を契機に、国家に新たな正統性を掲げるため、

東南（揚州、會稽）で崩御した金徳の禹を顕彰する。これにより孫吳は、東南の運氣と禹の金徳を結合する独自の正統性を持つに至っていたのである。<sup>19)</sup>

もちろん、曹魏を継承して金徳を主張することは、西晉の正統性と重複するため、西晉の陳壽は『三國志』にこれを記さない。したがって、孫吳の金徳が東晉にどのような受け継がれたのかを明確にすることはできないが、東晉が西晉の金徳を踏襲しながら、孫吳の金徳と東南の運氣を継承する際に、その手段の一つを蔣侯神信仰に求めたとしても不自然ではない。それは、江東の土地神である蔣侯神が、金徳であったことを『搜神記』が次のように伝えているためである。

搜神記に曰く、「蔣子文なる者は、廣陵の人なり。酒を嗜み色を好み、常に自ら謂へらく、『己の骨清ければ、死して當に神と爲るべし』と。漢の末に秣陵の尉と爲り、賊を逐ひて鍾山の下に至るも、賊撃ちて額を傷つけ、因りて綬を解きて以て之を縛るも、頃く有りて遂に死す。吳の先主の初めに及び、其の吏文を道に見るに、白馬に乗り、白羽扇を執り、侍従平生の如し。文曰く、『我當に此の土地神と爲るべきなり。吾が爲に祠を立てよ。爾しからずんば、蟲をして耳に入ら

しめ、災を爲さん」と。吳主 以て妖言と爲すも、後に果たして蟲人の耳に入ること有り、皆死し、醫も治す能はず。又云ふ、「我を祠らざれば、將に大火有らんとす」と。是の歲數と大火有り。吳主之を患ひ、封じて都中侯と爲し、印綬を加へ、廟堂を立つ。鍾山を改めて蔣山と爲して、以て其の靈を表するなり」と〔藝文類聚〕卷七十九。

「吳の先主」とは孫權のことであり、この話では蔣侯神を祀った時期は、孫權の時となる。しかし、蔣子文は、「白馬に乗り、白羽扇」という金徳を象徴するものを身につけている。蔣陵に葬られている孫權を大帝と仰ぎ、曹魏を継ぐ金徳を主張した孫皓の時期に行われた蔣侯神への祭祀の起源が、孫權期に求められた可能性を持つのである。そして、白を身にまとう蔣侯神は、自ら江東の「土地神」であると宣言する。東南の運氣に基づき即位した孫權は、その神威を見て「土地神」の蔣侯神を祭祀した、とされているのである。

王導が子の病に信仰し、東晉が成帝期より祭祀した蔣侯神とは、このように、白を象徴とする金徳の属性を持つ江東の「土地神」であり、孫權期より信仰が始まったとされていた。孫吳が唱えていた東南の運氣と金徳を継承し、旧

孫吳領に、旧孫吳臣下の支持を受けて成立した東晉は、蔣侯神信仰を継承することにより、江東を支配する孫吳の正統性をも継承したのである。

この後の蔣侯神信仰の展開を検討すると、西晉では曹魏を、東晉初期には三國すべての正統性を継承していた東晉が、孫吳のみを顕彰しているように理解できる話がある。

劉赤斧なる者は、夢に蔣侯に召され主簿と爲る。日々に促さるれば、乃ち廟に往き情を陳ぶ。「母老い子弱く、情事果たして切なれば、放恕を蒙らんことを乞ふ」と。會稽の魏邊才藝多く、善く神に事ふ。邊と自ら代はらんことを請ふ。因りて叩頭して流血す。廟祝曰く、「特だ相屈せんことを願ふのみ。魏邊は何人にして斯の擧に擬せるや」と。赤斧固く請ふも、終に許さず。尋いで赤斧死す。右此の一驗は志怪傳に出づ〔法苑珠林〕卷六十六怨苦篇。

この話は、明代の輯本『搜神記』に収録されているが、『法苑珠林』が「志怪傳に出づ」と明記するように、東晉の孝武帝の尙書左丞となつた祖臺之の『志怪』<sup>(20)</sup>に収められる話である。そこでは、蔣君は、夢で劉赤斧を主簿としようとし、拒否した劉赤斧はやがて死去する。劉赤斧という名は、火徳で赤を象徴とする漢、孫吳と同時期のものとし

ては蜀漢を指す。劉赤斧が固辞すると、魏邊が代わろうとするが許されない。魏邊は明代の輯本『搜神記』では「魏過（魏の過ち）」とされ、その方が曹魏を示す呼称としては分かりやすい。

従わない蜀漢は死去し、曹魏は相手にもされない。そうした力を持つものが、孫呉の守護神であり、東晉が祭祀を行っていた蔣侯神である、と東晉末期の『志怪』は記す。

ここでは、三國が対等に語られることはない。三國すべてを晉が継承したとする干寶の『搜神記』よりも、孫呉への比重が高くなる「南朝」化が進展していることを理解できよう。

しかし、東晉に代わった劉宋の高宗は、淫祀を弾圧するなかで、蔣侯神への祭祀を禁絶する。蔣侯神の金徳は、劉宋を正統化し得ないためであろう。それでも、江東の守護神である蔣侯神を無視しながら、江東に国家を維持することとは難しく、やがて劉宋で復活した蔣侯神は、南齊の時には帝位を授けられるに至る（『六朝事迹編類』卷十二廟宇門）。

蔣侯神は、孫呉の継承者として東晉を位置づけることを正統化するために祭祀された。それを伝える『搜神記』の三國時代の歴史観は、それでも三國鼎立を正統とする段階

に止まっていた。これに対して、東晉末に成立した『志怪』では、蔣侯神は蜀漢も曹魏も正統とはせず、孫呉のみを顕彰している。ここに、六朝概念<sup>(2)</sup>の形成の端緒を見ることが出来る。それは、漢民族が南朝であることの容認、すなわち「南朝」化の始まりでもあった。

#### おわりに

干寶の『搜神記』は、孫策や孫權に対する批判的な記事を収録するが、それだけを理由に孫呉に批判的であった、と理解することは誤りである。干寶は、天人相關説に基づき孫休への天譴と孫皓への事應を記すように、孫呉を天命を受けた正統な国家と認めていた。

陸機は、「弁亡論」で孫呉の評価と滅亡理由を述べるなかで、孫呉を曹魏と対峙させるために、三國鼎立の歴史観を有していた。これに対して、干寶の『搜神記』は、孫呉の滅亡理由と東晉による正統性の継承を述べるなかで、江南しか支配できない東晉の正統性を主張するために、東晉が鼎立する三國のすべてを継承する、という歴史観を有していた。

蔣侯神は、孫呉の継承者として東晉を位置づけることを正統化するために祭祀された。金徳の蔣侯神の祭祀が、劉

宋の初めに一度は断絶しながらも、それ以降の南朝に継承されたのは、孫呉末や東晉のみを正統化するだけの神格から、江東、具体的には建康の守護神としての性格を強くしていたためであろう。そうした中より、孫呉を嚆矢とする「六朝」という概念が形成されていくが、これについては、機会を改めて論ずることにしたい。

#### 注

- (1) 渡邊義浩『「搜神記」における天人相関説と五気変化論』(『東洋文化研究所紀要』一六八、二〇一五年刊行予定)。
- (2) 渡邊義浩「干宝の『搜神記』と五行志」(『東洋研究』号数未定、二〇一六年刊行予定)。
- (3) 小南一郎「干宝『搜神記』の編纂(上)」(『東方学報』京都六九、一九九七年)。
- (4) 田中靖彦「初期東晉における孫呉観—干宝『搜神記』を中心に」(『六朝學術学会報』七、二〇〇六年)。
- (5) 李剣国(輯校)『新輯搜神記』(中華書局、二〇〇七年)前言の「干宝籍貫仕歴考」を参照。
- (6) 『抱朴子』の孫呉観については、渡邊義浩「抱朴子の歴史認識と王導の江東政策」(『東洋文化研究所紀要』一六六、二〇一四年)を参照。
- (7) 孫策と江東豪族との対峙性については、渡邊義浩「孫呉政権の形成」(『大東文化大学漢学会誌』三八、一九九九年、『三  
国政権の構造と「名士」』汲古書院、二〇〇四年に所収)を参照。
- (8) 感生帝説と天人相関説については、渡邊義浩「鄭箋の感生帝説と六天説」(『両漢における詩と三伝』汲古書院、二〇〇七年、『後漢における「儒教国家」の成立』汲古書院、二〇〇九年に収録)を参照。
- (9) 王莽が舜の子孫として土徳を主張したことは、渡邊義浩「王莽の革命と古文学」(『東洋研究』一七九、二〇一一年)、『王莽—改革者の孤独』(大修館書店、二〇一二年)、曹魏のそれは渡邊義浩「三国時代における「公」と「私」」(『日本中国学会報』五五、二〇〇三年、『三国政権の構造と「名士」』汲古書院、二〇〇四年に所収)を参照。
- (10) 『異苑』に見える諸葛亮説話については、渡邊義浩「諸葛亮像の変遷」(『大東文化大学漢学会誌』三七、一九九八年)を参照。
- (11) 陸機の歴史観については、渡邊義浩「陸機の君主観と「弔魏武帝文」」(『大東文化大学漢学会誌』四九、二〇一〇年、『西晉「儒教国家」と貴族制』汲古書院、二〇一〇年に所収)を参照。
- (12) 葛洪が受けた陸機の影響については、渡邊義浩「葛洪の文学論と「道」への指向」(『東方宗教』一二四、二〇一四年、『古典中国』における文学と儒教』汲古書院、二〇一五年に所収)を参照。
- (13) 王隱の晉書に曰く、「中宗詔して王隱に問ひて曰く、「荊州

兩足の虎を送る、其の徴何爲れぞ」と。隱曰く、「謹みて先臣の銓傳を案ずるに、太康の時 兩足の虎あり、因りて詩を作りて以て諷す。銓意以へらく、晉は金行なり、金は西方に在り、其の獸は虎爲り。虎に四足有るは、猶ほ國に四方有るがごとし。半ばの勢無くして又獲らへらるは、將に有愍・懷の禍有らんとす」と〔開元占經〕卷一百十六。

- (14) 毛蟲の孽 晉武帝の太康六年、南陽 兩足の虎を送る。此れ毛蟲の孽なり。識者其の文を爲りて曰く、「武形虧くる有り、金虎儀を失するも、聖主 天に應ずれば、斯の異 何をか爲さんや」と。亂に非ざるを言ふなり。京房の易傳に曰く、「足少なき者は、下任に勝へざるなり」と。干寶曰く、「虎なる者は陰の精にして陽に居る、金の獸なり。南陽は、火の名なり。金の精 火に入りて其の形を失ふ。王室 亂るるの妖なり。六は、水數なり。言ふところは水數 既に極まり、火應 作るを得て、金 其の敗を受くるなり。元康九年に至り、始めて太子を殺すは、此に距たること十四年。二七 十四は、火始終相乗の數なり。帝の受命より、愍・懷の廢せらるるに至るまで、凡そ三十五年なり」と〔宋書〕卷三十一 五行志二。
- (15) 『搜神記』の輯本は、蜀漢の滅亡の後を、「六年にして魏廢れ、二十一年にして吳 平らぐ。是れ司馬に歸するなり」と記述する。このほうが分かりやすい。本稿は、『搜神記』が引用される原書を底本としたが、輯本を参照する際には、『搜神記』（中華書局、一九七九年）に拠り、注（五）所掲李著書も参照した。

- (16) 渡邊義浩「陳寿の『三国志』と蜀学」（狩野直禎先生奉寿記念『三国志論集』汲古書院、二〇〇八年、『西晉「儒教国家」と貴族制』汲古書院、二〇一〇年に収録）を参照。

- (17) 胡阿祥「蔣山・蔣州・蔣王廟与蔣子文崇拜」（『南京師專科學校學報』一五—二、一九九九年）、陳聖宇「六朝蔣子文信仰探微」（『宗教學研究』二〇〇七—一、二〇〇七年）を参照。

- (18) 姚瀟鵬「蔣子文信仰与六朝政治」（『學術研究』二〇〇九—一、二〇〇九年）。なお、南宋以降、孫權の祖父とされる孫鍾の諱を避けるために、鍾山が蔣山に改名されたという伝承が生まれ、孫鍾實在の証拠となることは、吉永壮助「鍾山改名の由来について——蔣子文と孫鍾の伝説をめぐって」（『芸文研究』八五、二〇〇三年）を参照。

- (19) 渡邊義浩「孫呉の正統性と国山碑」（『三国志研究』二、二〇〇七年）。

- (20) 『志怪』については、富永一登「魯迅輯『古小説鈞沈』校釈——祖台之『志怪』」（『中國學研究論集』八、二〇〇一年）を参照。

- (21) 六朝概念については、胡阿祥「六朝概念弁析与六朝文化研究」（『東晉南朝僑州郡県与僑流人口研究』江蘇教育出版社、二〇〇八年）を参照。